



COMET Phase-I

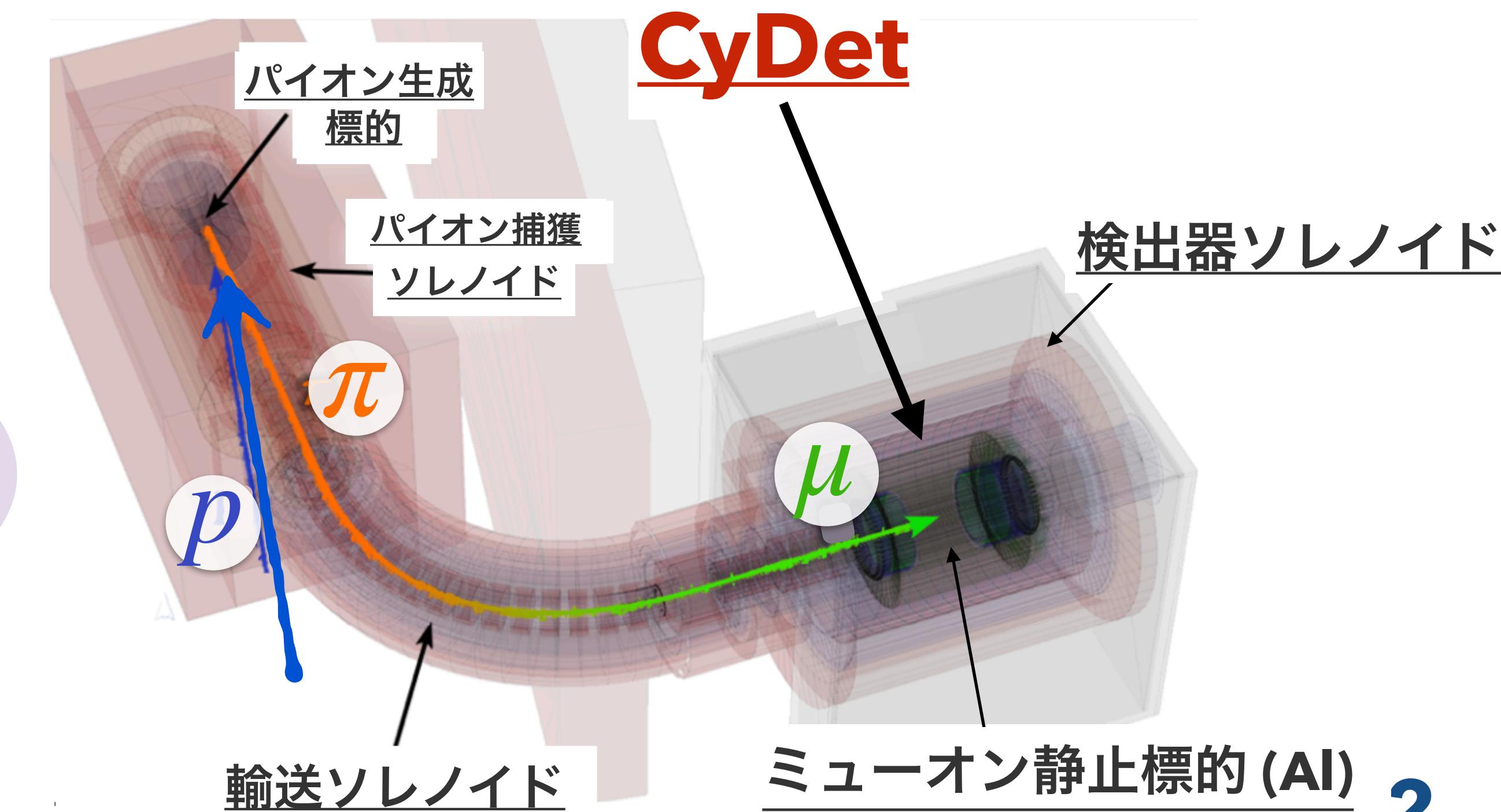
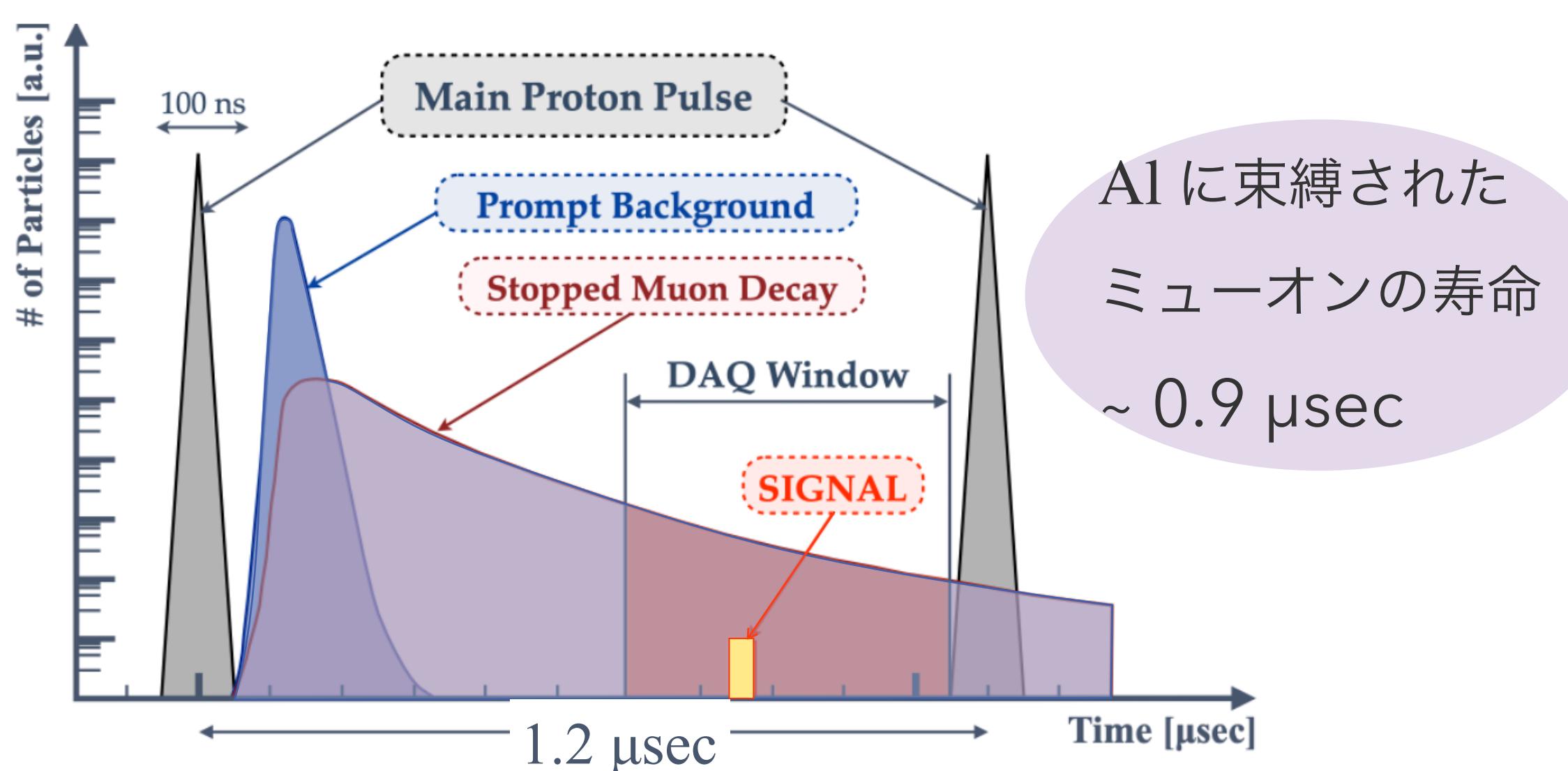
CyDet トリガーシステムの開発状況

大阪大学 山田 千尋

COMET Phase-I @ J-PARC, Japan

Al 原子核中の $\mu - e$ 転換探索実験 ... 荷電レプトンフレーバー非保存過程

- ニュートリノ振動を含めた標準模型での分岐比 ... $\mathcal{B}(\mu^-N \rightarrow e^-N) < O(10^{-57})$
- 新物理 (SUSY-GUT, Z', etc..) ... $\mathcal{B}(\mu^-N \rightarrow e^-N) \sim 10^{-15} - 10^{-13}$
- 目標単一事象感度:** 3×10^{-15} (測定期間: 150日)
 - 現在の上限値 w/ Au $\mathcal{B}(\mu^-Au \rightarrow e^-Au) = 7 \times 10^{-13}$ 90% C.L. (SINDRUM II) Eur. Phys. J. C47, pp.337–346 (2006).
- ビーム**
 - 大強度陽子ビーム $\sim 10^{12}$ proton/sec
 - 1.2 μsec 間隔パルスビーム



CDC (Cylindrical Drift Chamber)

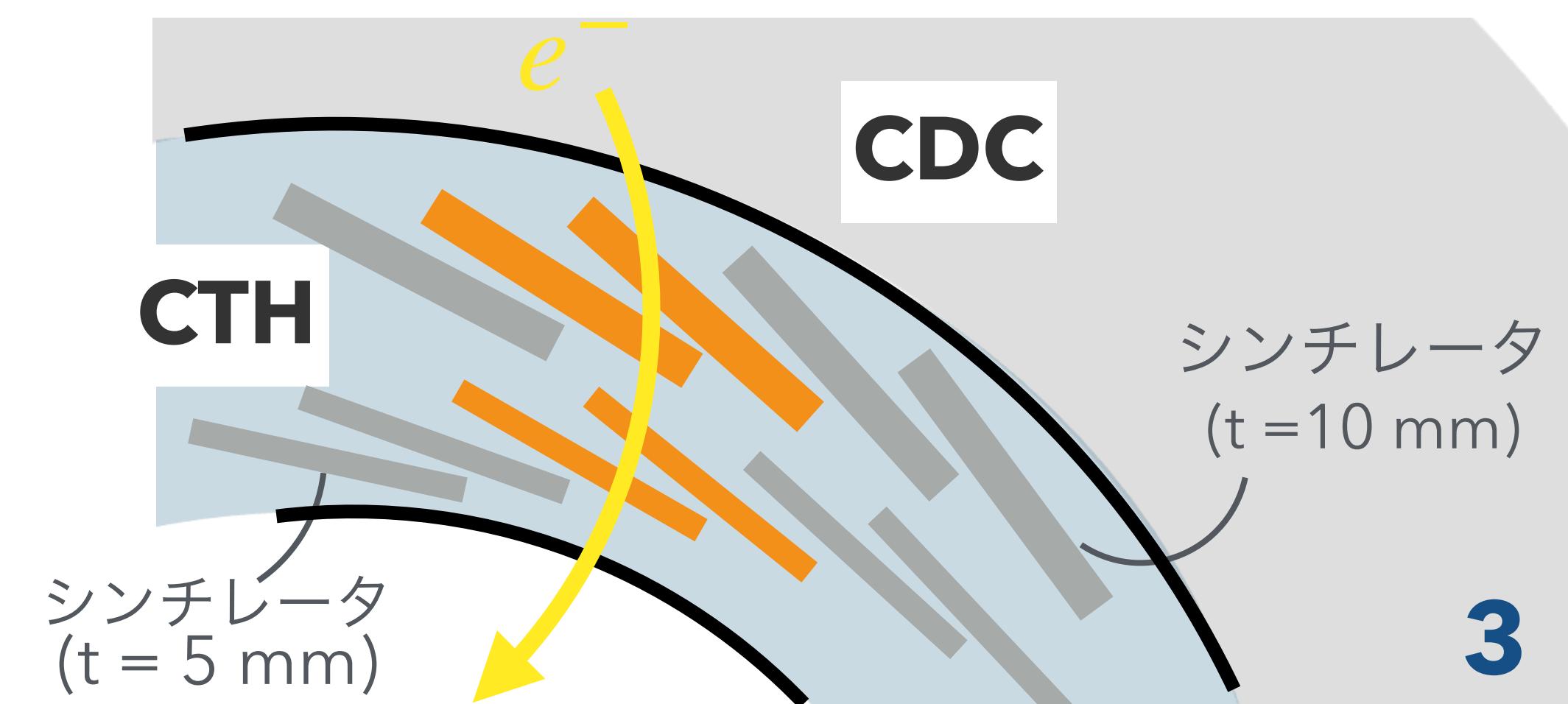
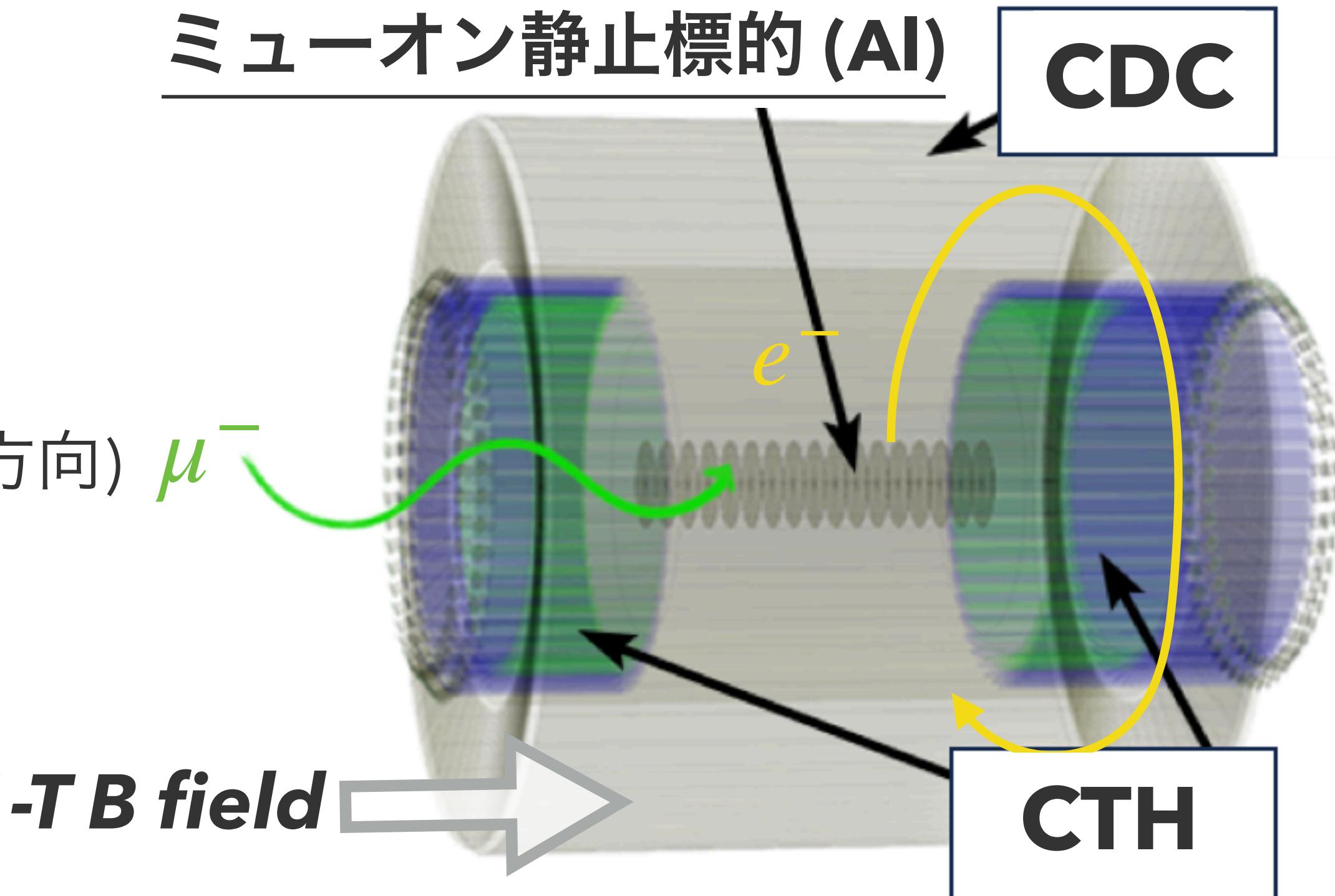
- 飛跡検出, 電子の運動量測定
- He:iC₄H₁₀ = 90:10
- センスワイヤー 約5000 本
 - 構造: 250セル(円周方向) × 20レイヤー(半径方向)
- 運動量分解能要求値 200 keV/c

A.Sato et al : [DOI:10.1016/j.nima.2024.169926](https://doi.org/10.1016/j.nima.2024.169926)

CTH (Cylindrical Trigger Hodoscope)

- Primary trigger を生成
 - 4重コインシデンスによる背景事象削減
- 時間分解能要求値 1 nsec
- プラスチックシンチレータ 64枚×2層×2(上流, 下流)

ミューオン静止標的 (AI)

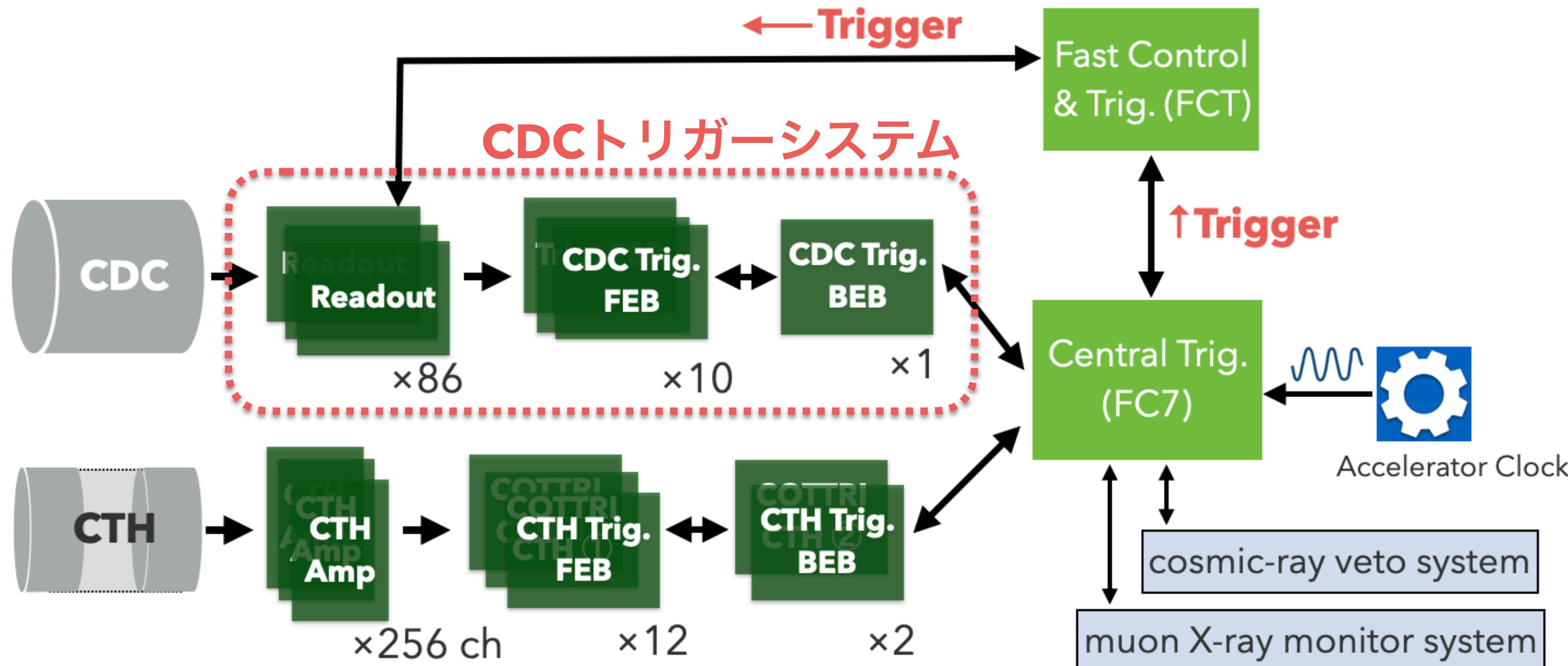


トリガーシステムに対する要求

- 信号事象選択効率 > 90%
- トリガーレート < 20 kHz
 - CTHのみのトリガーレート > 100 kHz → CDCトリガーとコインシデンスを取り背景事象削減
- 高速 & 固定トリガー遅延 < 8.5 μs
 - FPGAを用いたハードウェア処理
- 安定した通信 ~ 目標：デッドタイム1%未満
 - ケーブル選定, 長期安定性試験, etc..
- 高放射線耐性 $10^{12} \text{ n}_{\text{eq}}/\text{cm}^2$, 1 kGy @150日間
 - 高放射線耐性ICの選定、光通信を避ける、SEU対策

トリガーシステム

- 多段階ハードウェアトリガーシステム
- CTHとCDCそれぞれでトリガー判断→ Central Trig. (FC7) でコインシデンスをとる



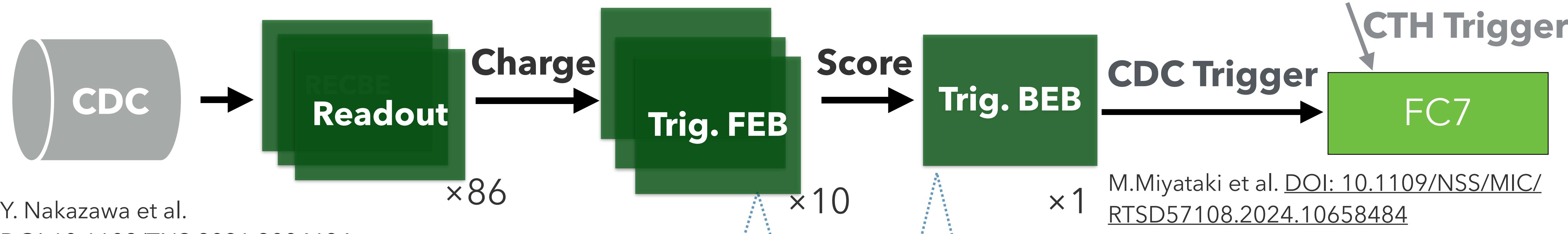
以下の基板にFPGA搭載

- CDC Readout** : Virtex-5
developed by Belle II
- Trig. FrontEndBoard (FEB),
Trig. BackEndBoard (BEB)** : Kintex-7
developed by COMET
- FCT** (Fast Control & Trigger) : Kintex-7
developed by COMET
- FC7** : Kintex-7
developed by CMS@CERN

現在の状況 : CDCトリガーシステムを構成する全基板を接続, 固定遅延用 fw開発中

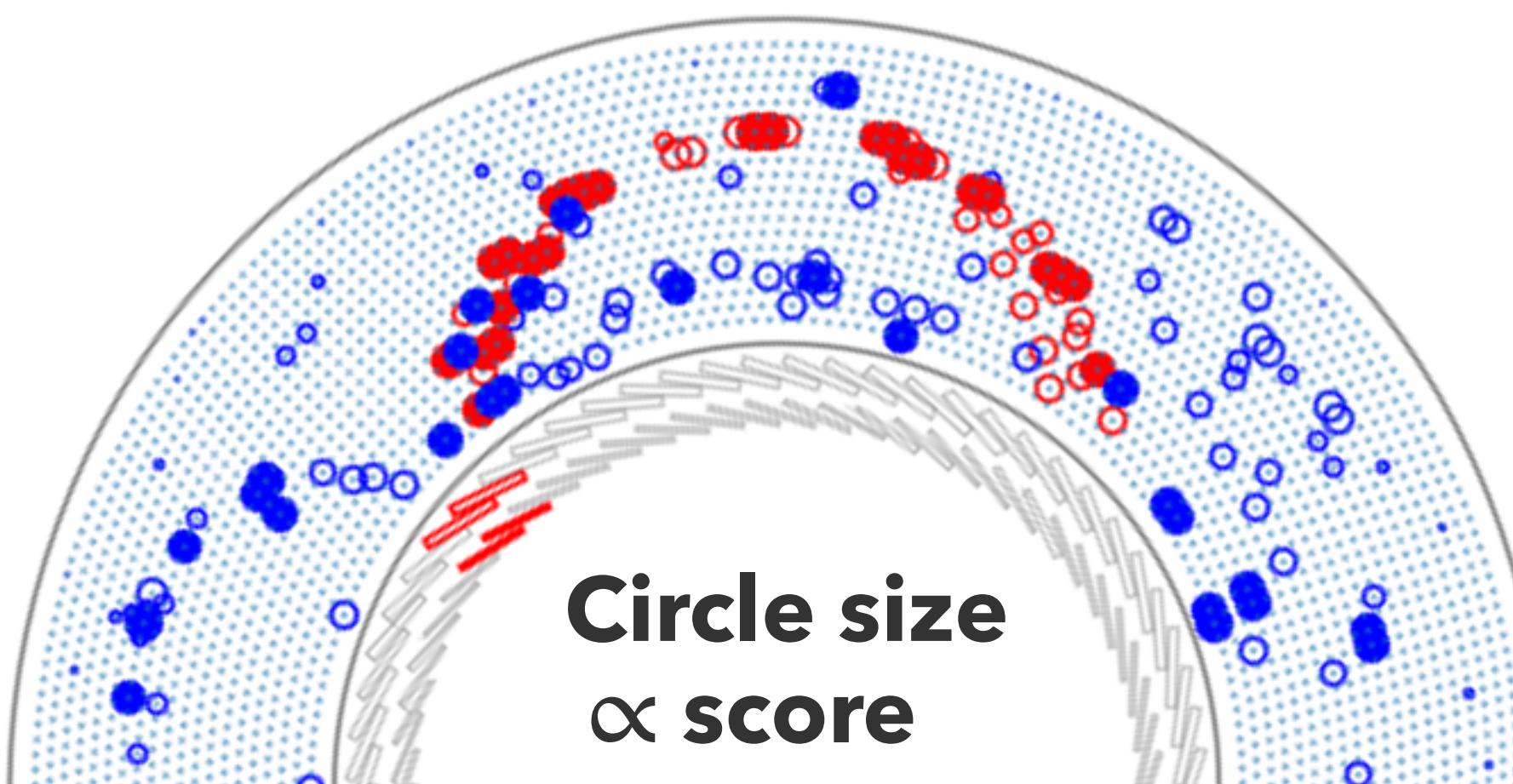
このトーク: CDCトリガーシステムの現状、(CTH : 住村さんの発表)

CDC トリガーシステム・アルゴリズム



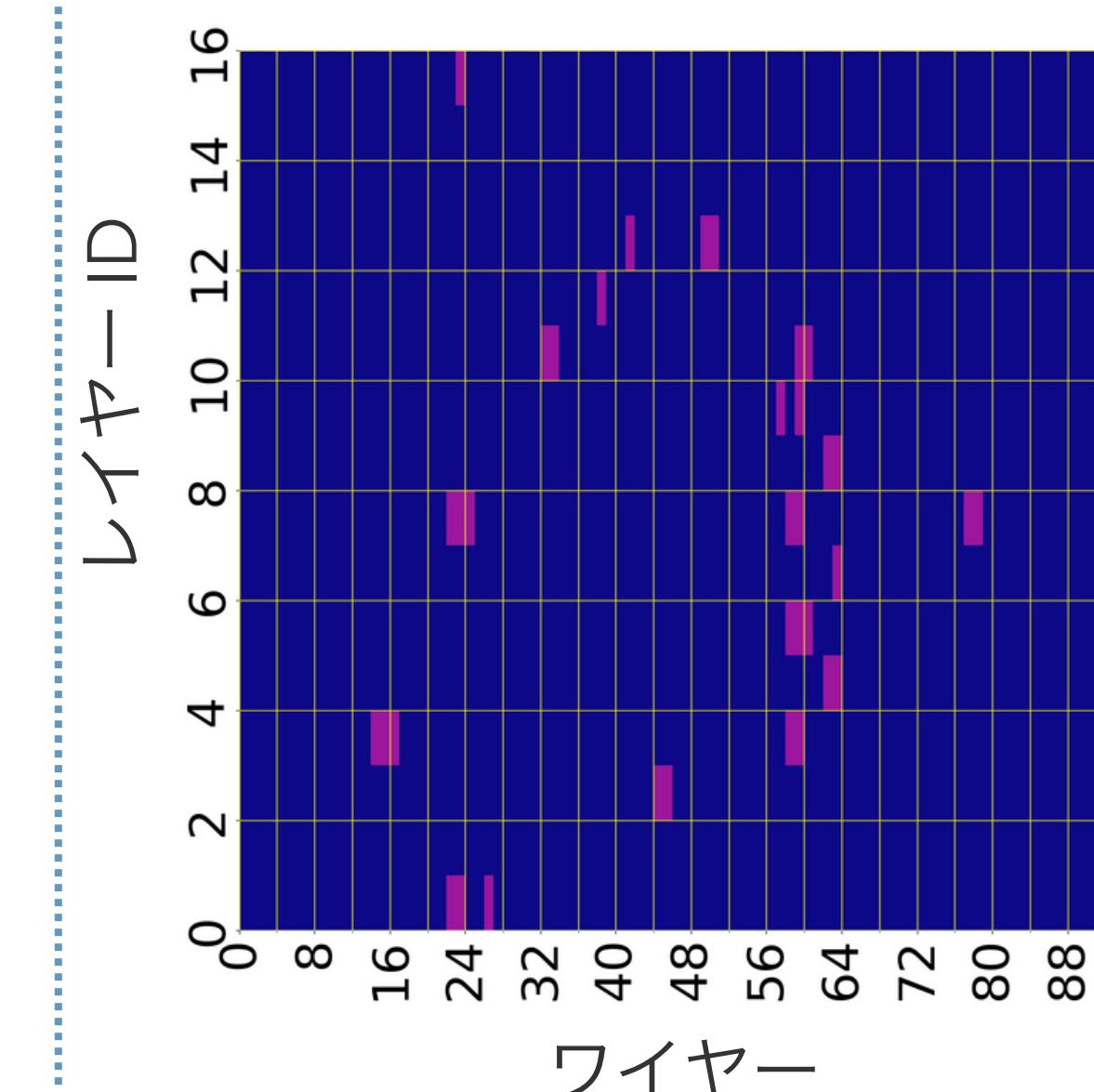
各ワイヤーにスコア付け (GBDT)

Input : ターゲットワイヤーの ADC sum (2bit @10MHz)
隣り合う二つのワイヤーのADC sum (2bit @10MHz x2)
レイヤーID

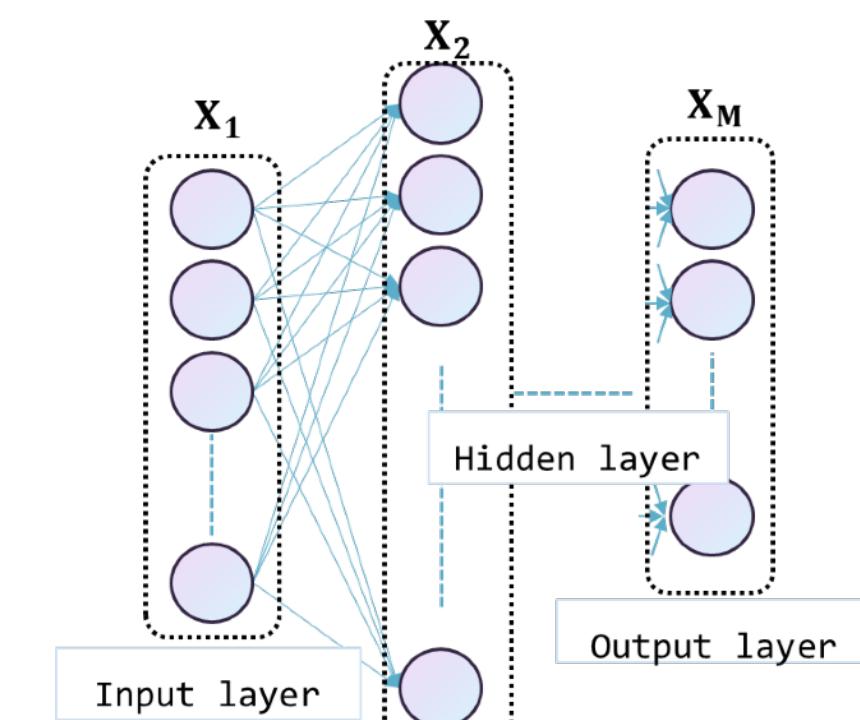


Score ≤ 0.75
○ Signal
○ Back ground
Score > 0.75
● Signal
● Back ground

スコア分布から事象分類 (Neural Network)



開発中
2024年の計測システム
研究会で宮滝さんが発表



トリガーシステム基板間の通信

接続 : DisplayPort (DP) ケーブル (copper)

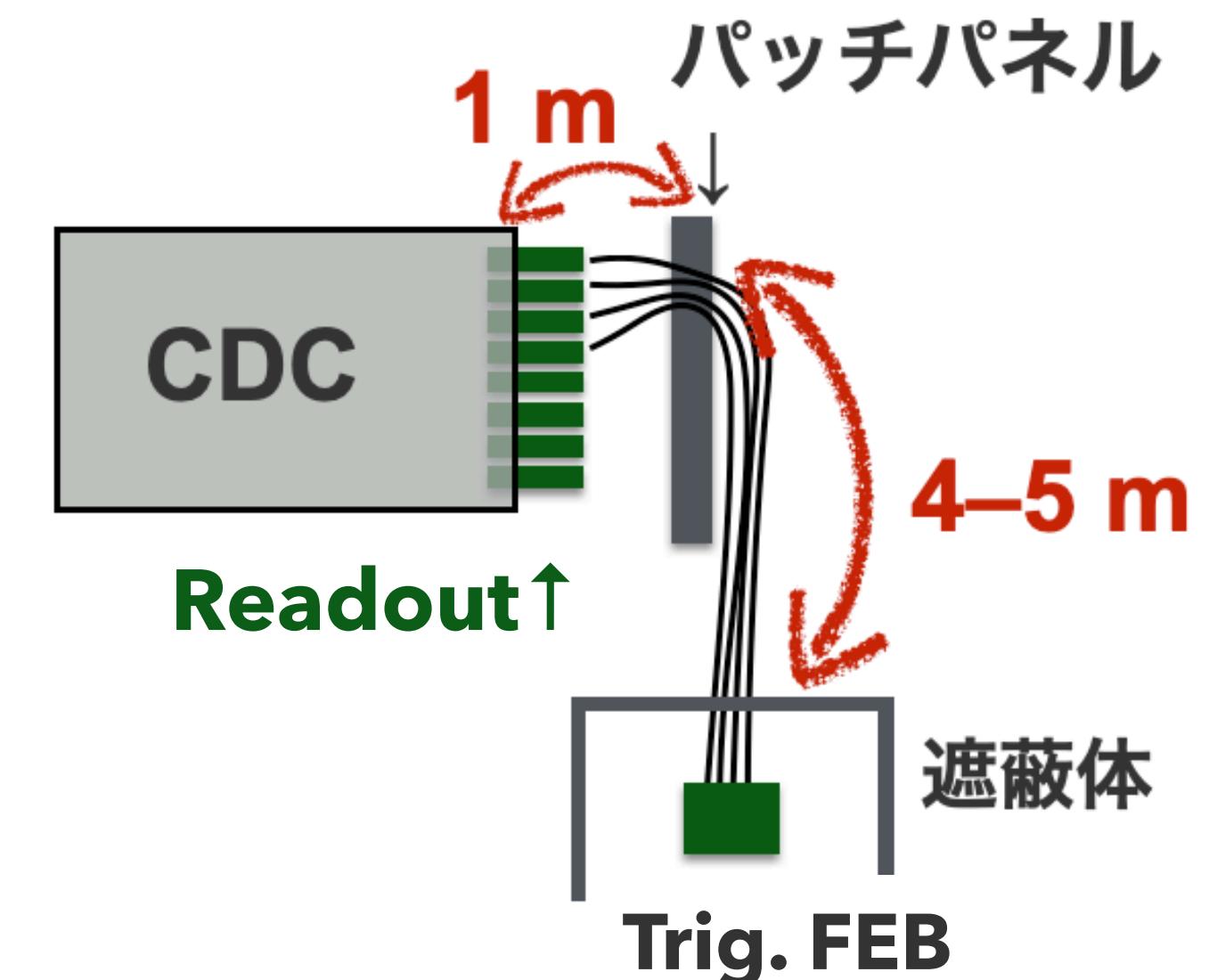
RECBE - Trig. FEB 間 長さ要求値 : 約5 m

通信プロトコル : Aurora 8b/10b

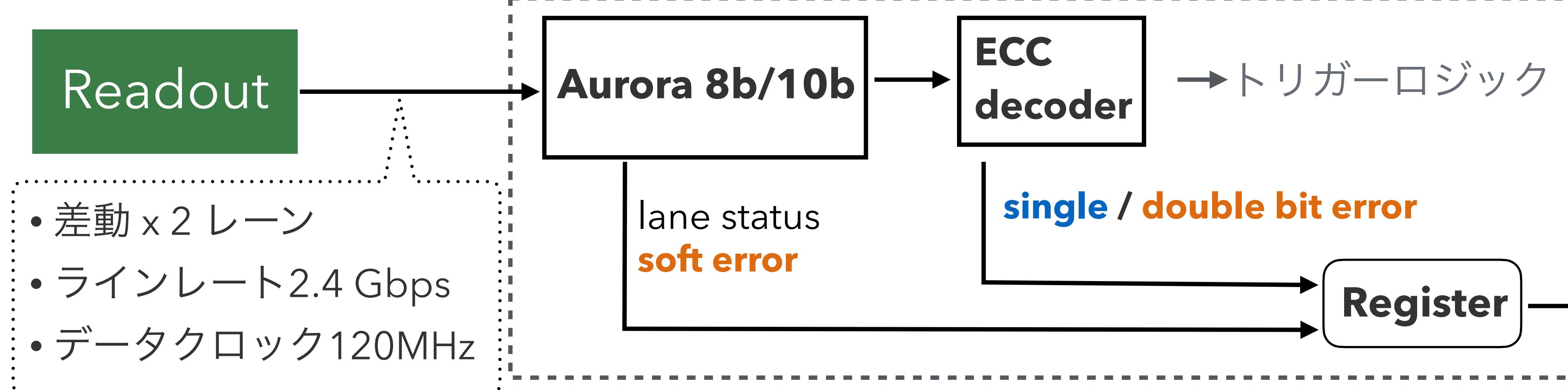
通信エラー検出 :

- Aurora 8b/10b : **soft error** (8b10b符号エラー), lane status
- Error Correction Code (ECC) : **single bit error**, **double bit error**

ケーブル配線イメージ図



FPGA on Trig.FEB



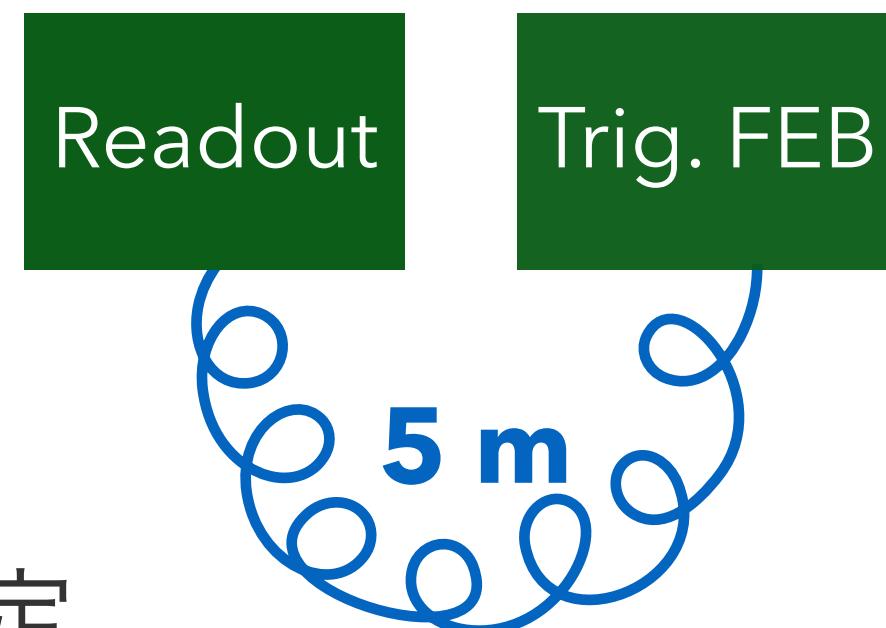
青: 自動修正可能

オレンジ: 自動修正不可

CDCトリガー基板を用いた測定

・通信安定性測定

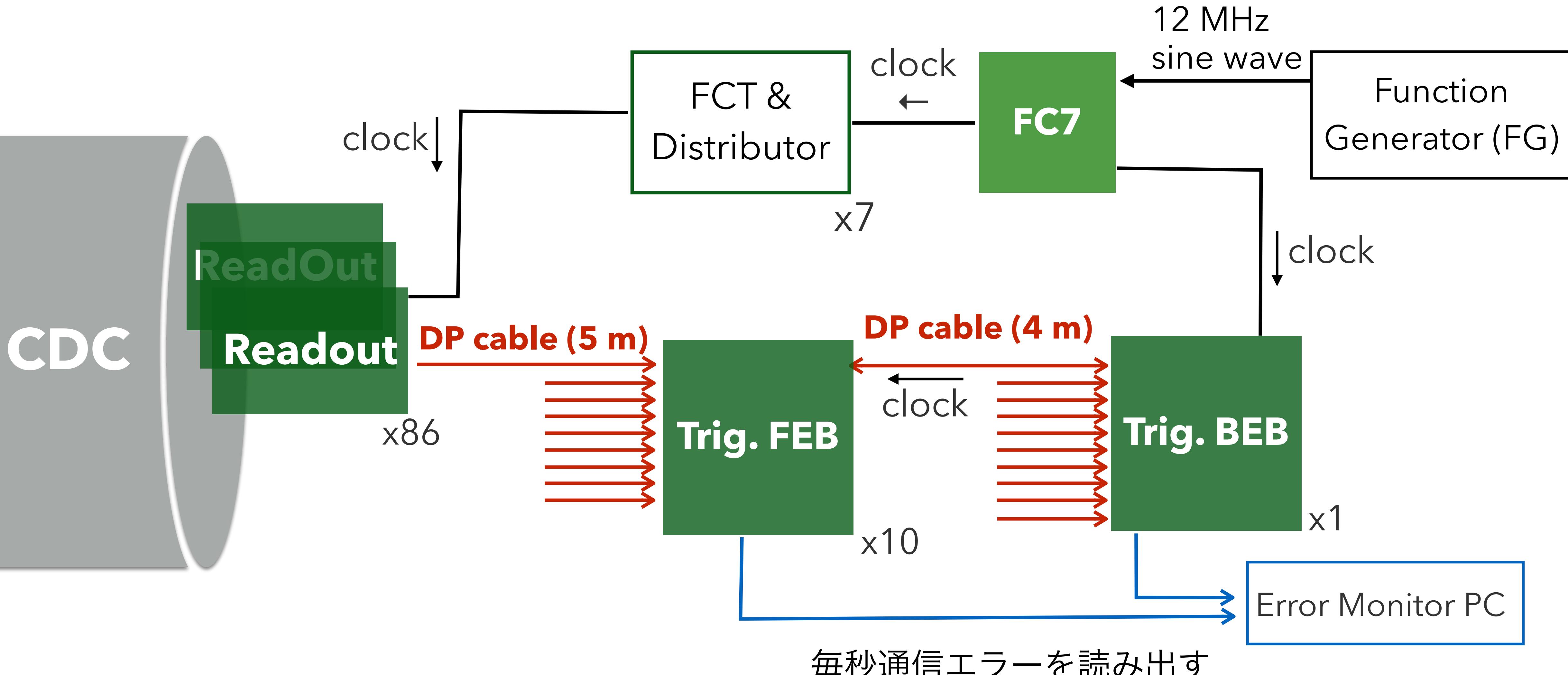
- ・本番用に選定した5 mのDPケーブルを使用し、通信安定性を確認
- ・通信が切斷した場合 → 通信リセット
 - ・回復不能の場合、firmware を再プログラムする：3分のデッドタイムを想定
- ・全ケーブル接続時の要求エラーレート $< 5.6 \times 10^{-5}$ **error/sec** for <1% デッドタイム



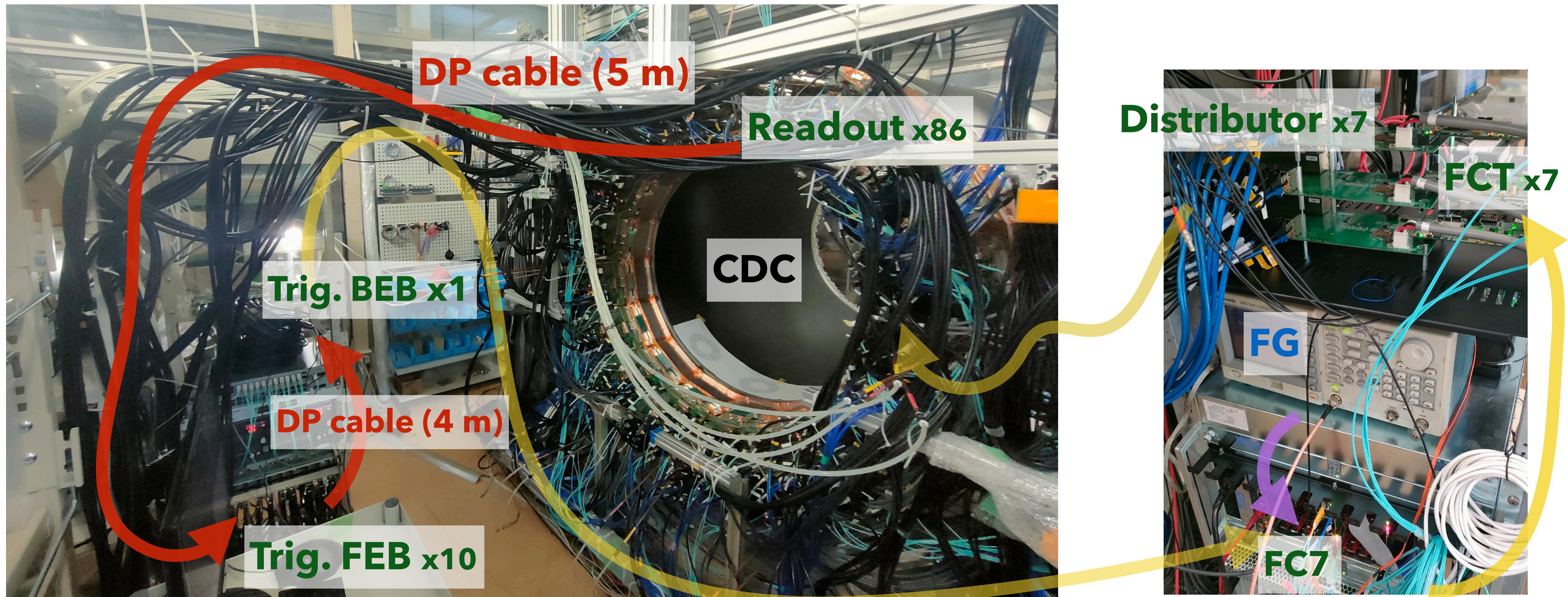
・トリガー遅延測定

- ・CDCトリガーだけで **8.5 μ sec 未満** の遅延要件を満たすか確認

通信安定性試験セットアップ



通信安定性試験 @ J-PARCハドロン実験準備棟



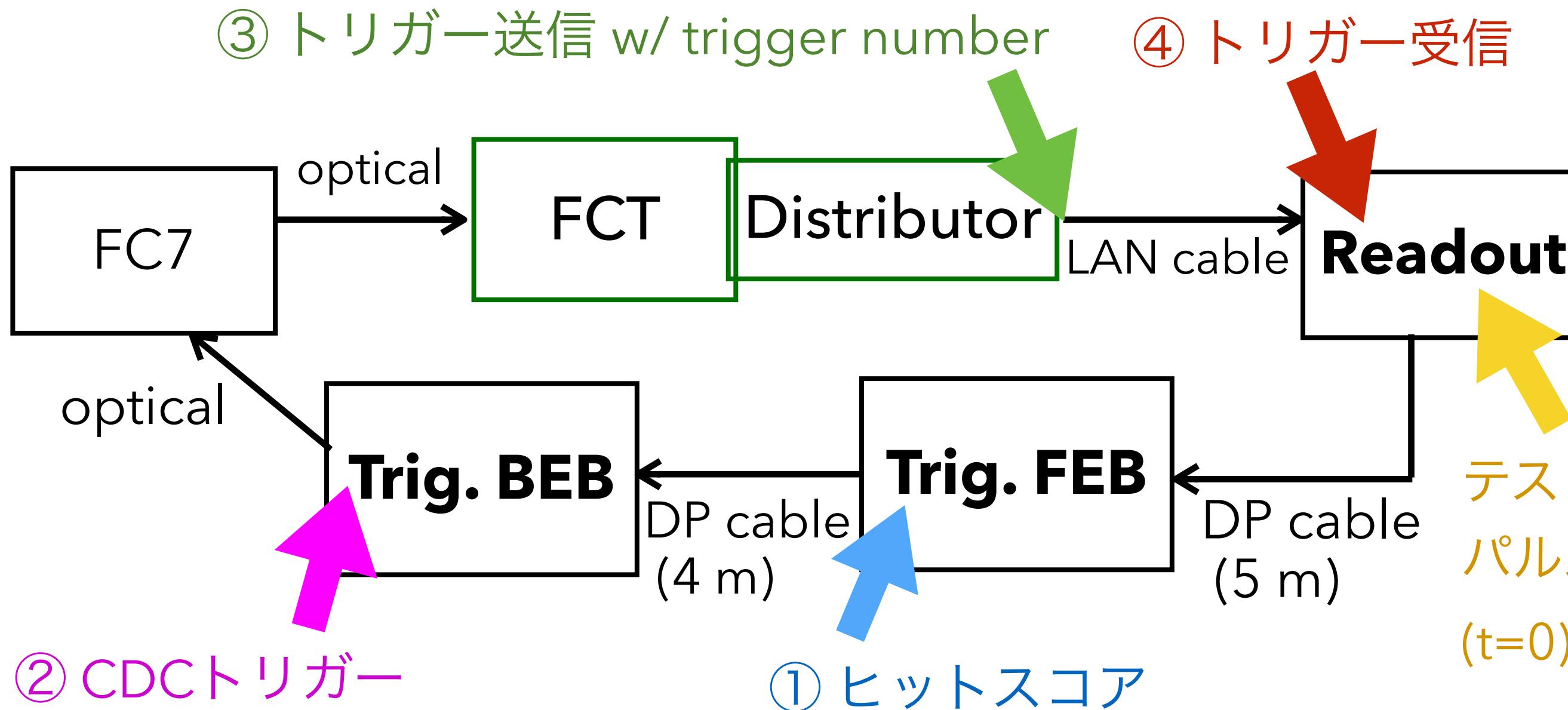
CDCトリガーシステムに関連する 全ケーブル,全基板 を接続

66,880 秒 (~18 時) 間測定 → 通信エラーなし

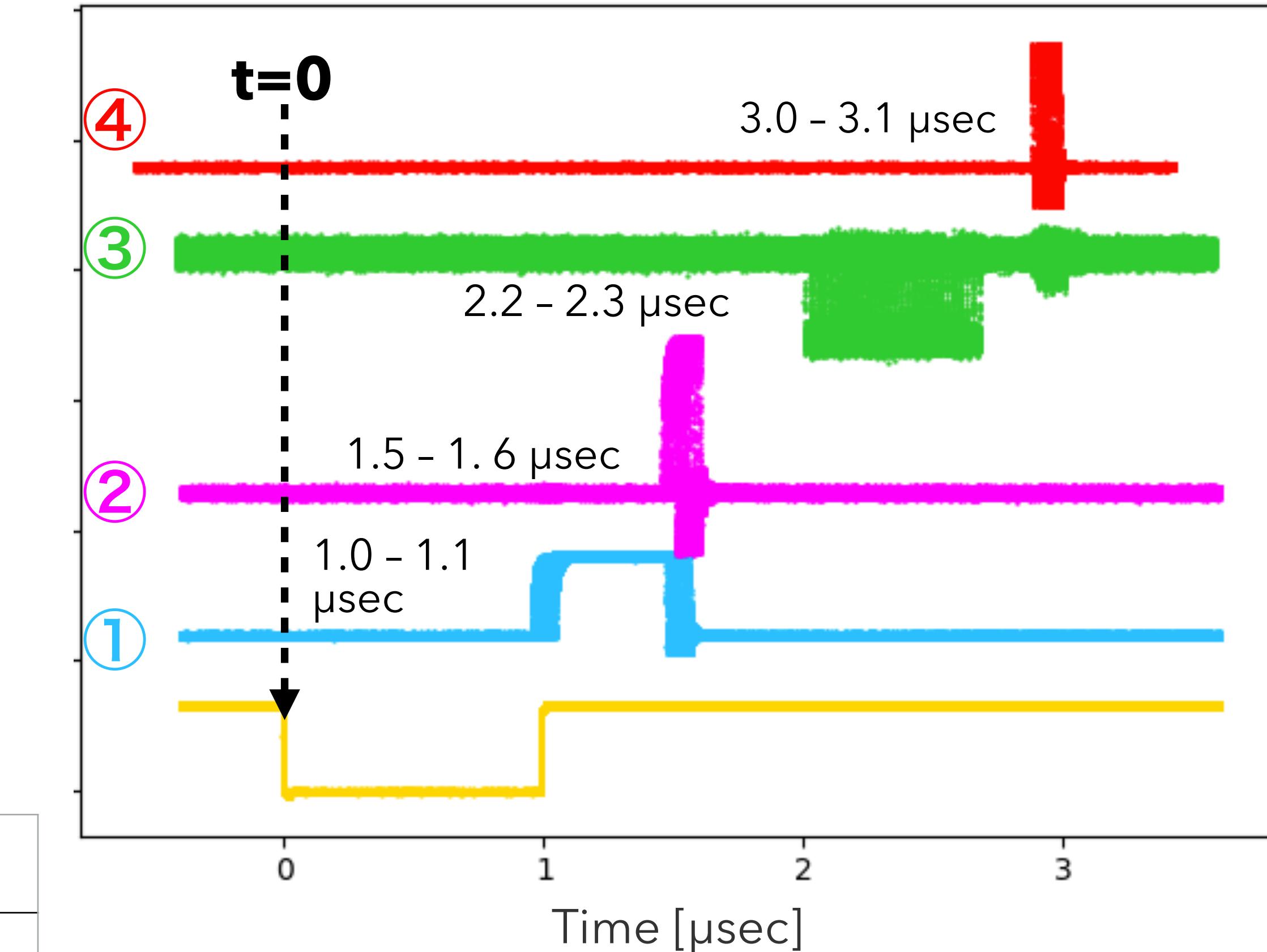
エラーレート $< 4.6 \times 10^{-5}$ error/sec (95% C.L.)

トリガー遅延測定

各基板1枚ずつのチェーン



	遅延時間 [μsec]
遅延時間測定値	3.0-3.1
CDCドリフト時間	0.4
Total	3.4 - 3.5

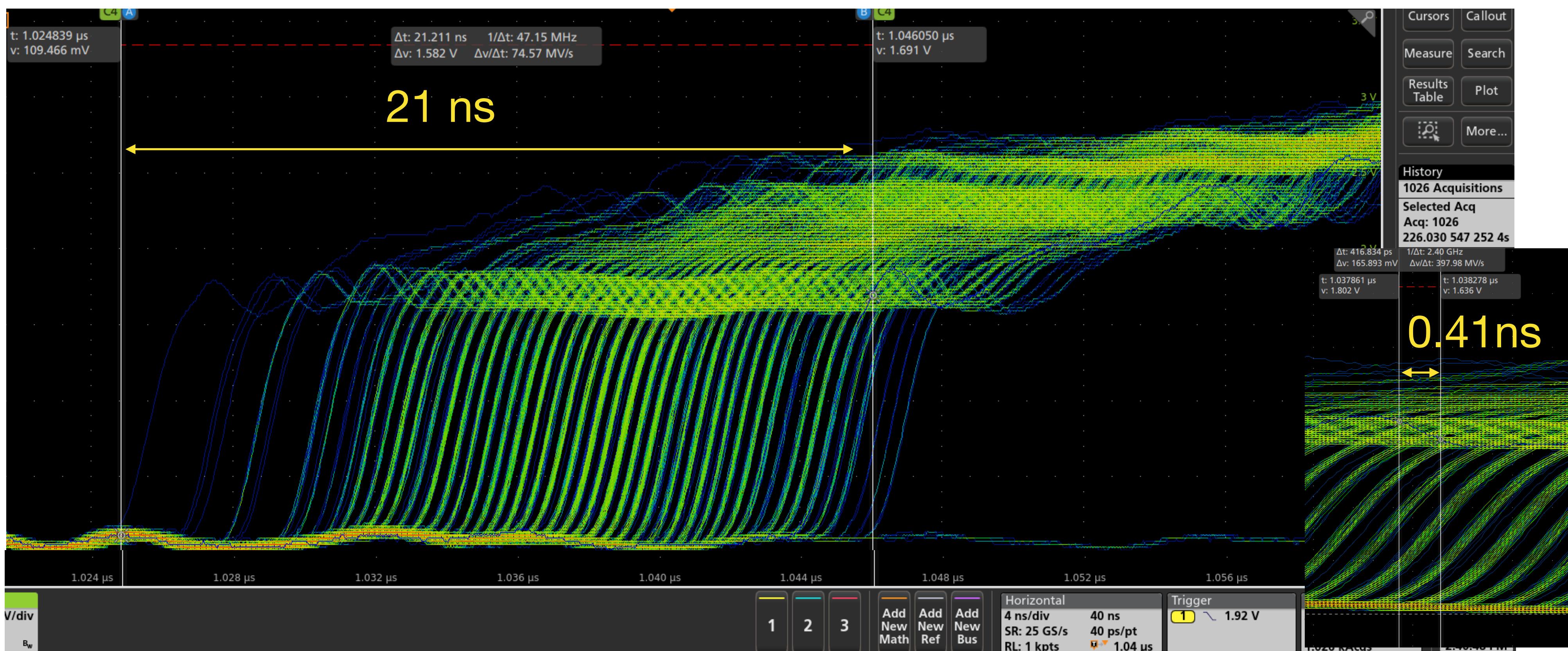


<< 8.5 μsec
要求値未満

トリガー遅延に関する問題点

- 通信モジュールをリセットすると遅延時間が変わる
- ATLASではこれを解決しているとの情報を聞き、教えを請う（去年の計測システム研究会）

trigger: テストパルス送信タイミング@Readout 信号: テストパルス受信タイミング@Trig. FEB



固定遅延通信firmware開発

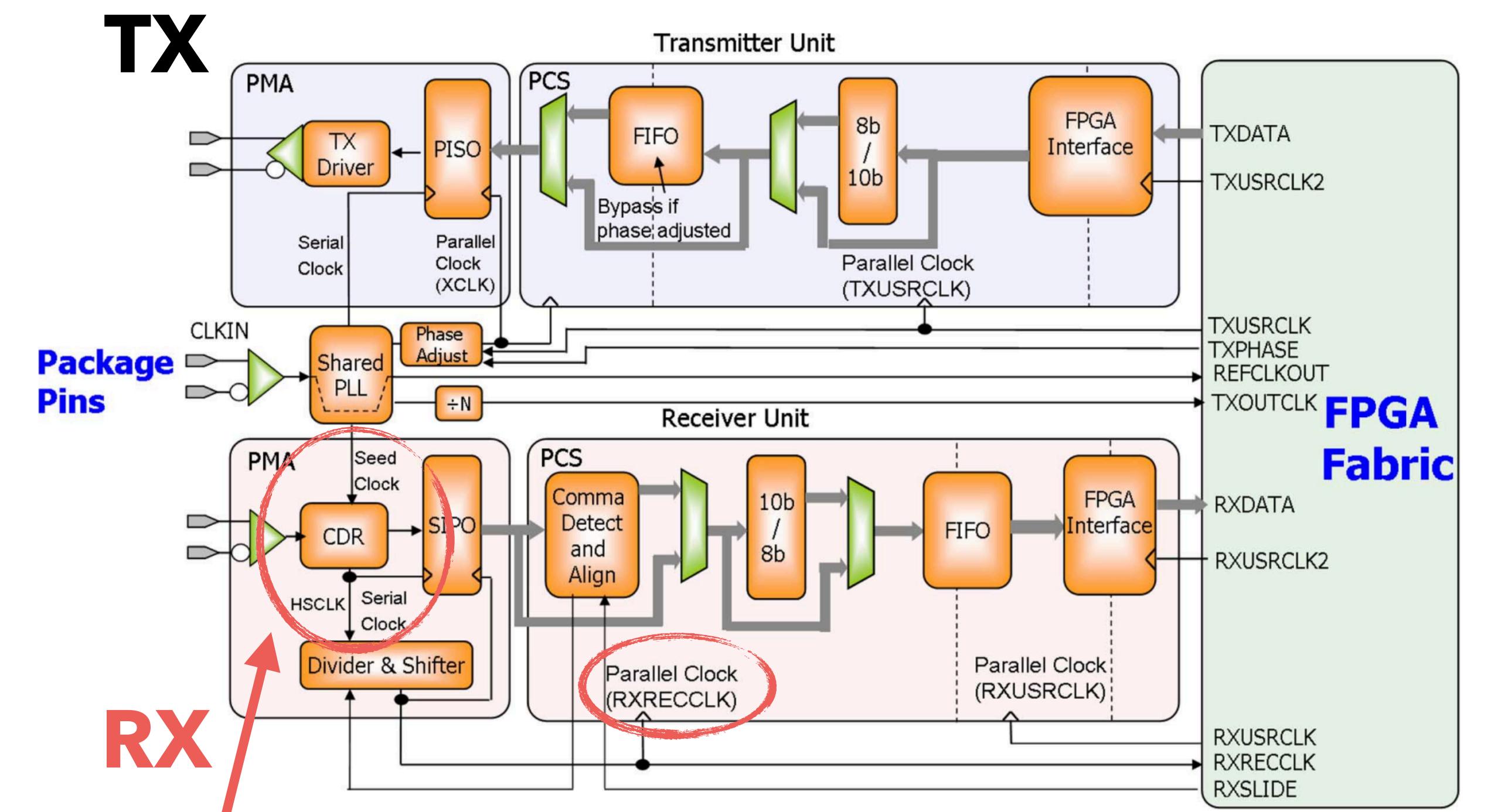
ATLASの手法↓を真似して通信モジュールを改修

ref.) R. Giordano and A. Aloisio, "Fixed-Latency, Multi-Gigabit Serial Links With Xilinx FPGAs,"

(⚠私の理解。間違ってたらすみません。。。)

遅延時間変動の原因

- RXバッファ, TXバッファの取り出し位置が変動
- リカバリクロックの位相がリセット毎で変動
シリアルデータクロックの周期 (UI) 単位でパラレルデータクロックの位相に自由度があり、パラレルデータのフレームをPCS (Physical Coding Sublayer) 層で調整する場合、リカバリクロックの位相が一意に決まらない



対処方法

- バッファはバイパスする
- 共通のリファレンスクロックを使っている場合にのみ可能
- パラレルデータビットシフトをPCS層ではなくPMA (Physical Medium Attachment) 層で行う

CDR (Clock Data Recovery) でパラレルデータクロックの位相が決まる

固定遅延通信firmware開発

具体的な実装

- これまで : Auroraプロトコルのモジュールを生成する LogicIPCore Aurora8b10b で通信モジュール作成
 - リンク層まで作ってくれるのでほとんどそのまま実装できる
 - 実装は比較的簡単だがカスタマイズが難しい
- GTX Transceiver Wizard IPで作り直し
- 物理層のみ作成され、自由度が高い (=難しい、、、)
 - 固定遅延の場合、レーンごとにリカバリクロックが異なるため、2 lane × 10 chのデータを合わせるのに苦戦

東大ATLAS奥村さん、KEK e-sys本多さんとかなり助けていただいています m(__)m

固定遅延通信firmware 構造図

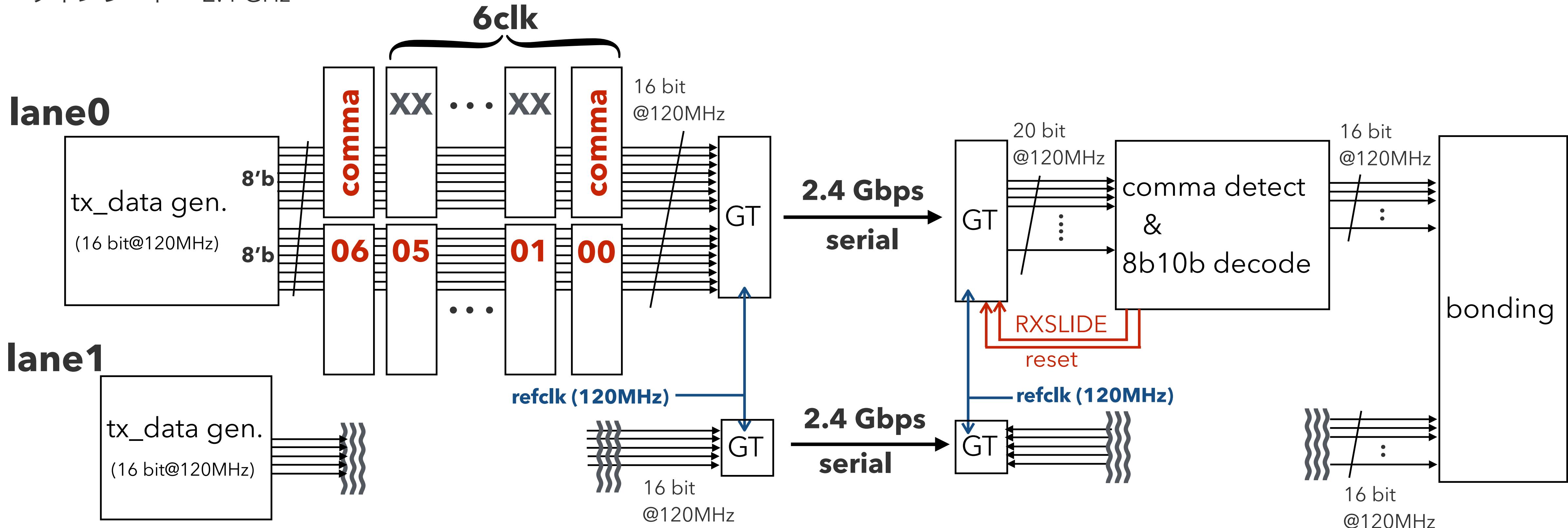
TX : テスト用データとして 8 bitのカウンタ + (6 clockに一回) カンマワード (K28.5) を送信

RX : カンマワードを検出するまでRXSLIDEをPMAモードで実行、偶数RXSLIDEの場合はリセットも送信

bonding : 共通クロックに載せ替え、カウンタを見てシフトレジスタでタイミング調整

リファレンスクロック (refclk) = 120MHz (全基板で共通のクロックソース)

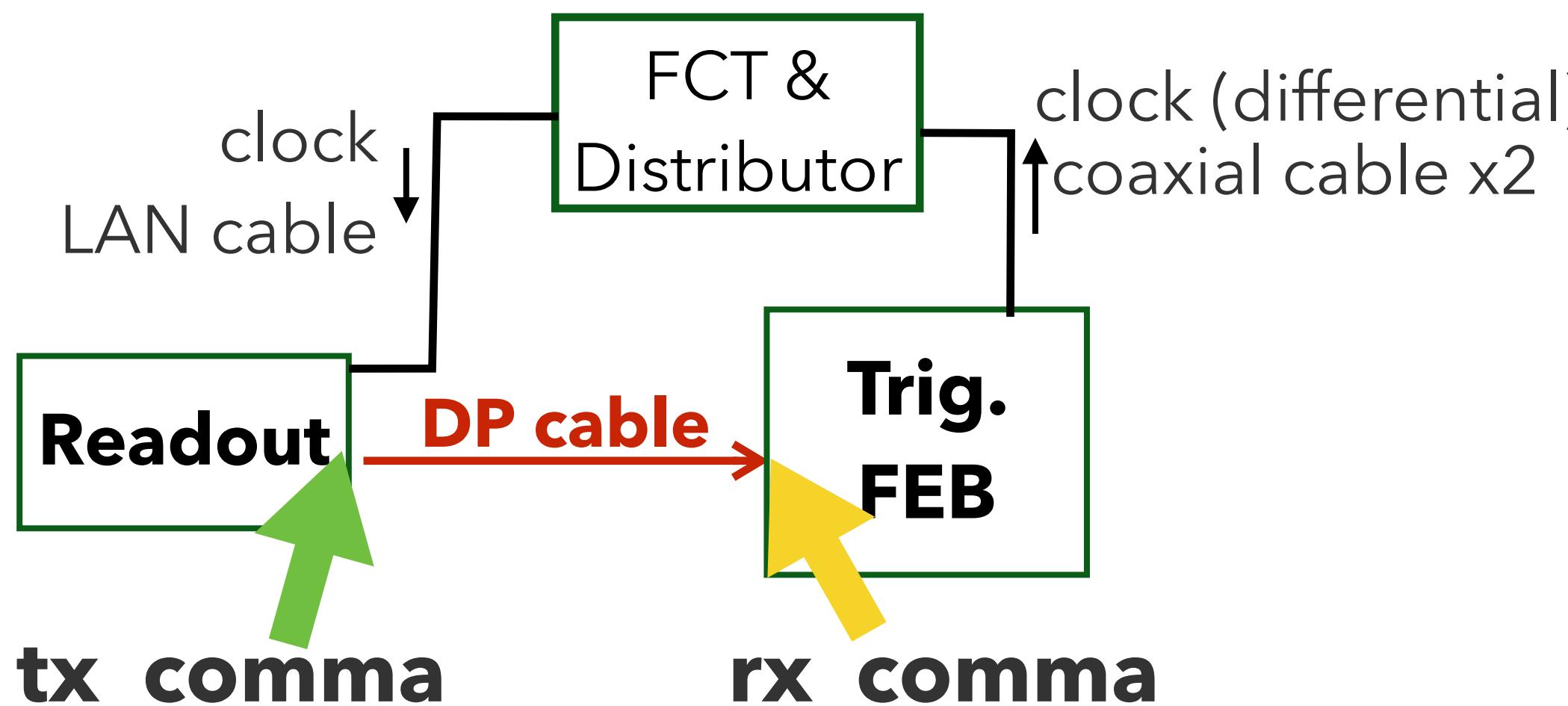
ラインレート = 2.4 GHz



固定遅延通信firmware検証 @ミニマムセットアップ

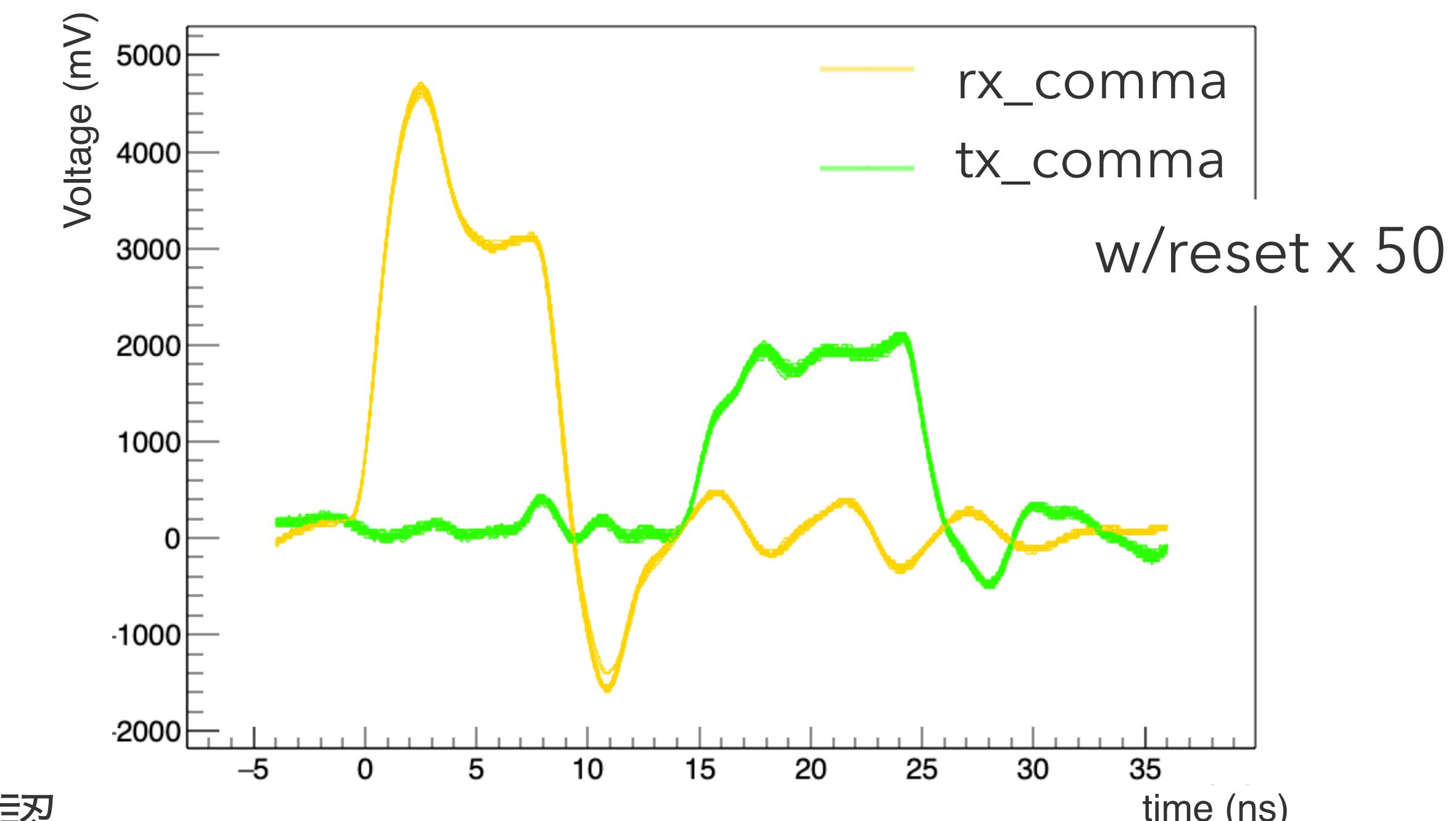
firmware開発用ミニセットアップで開発

ミニマムセットアップ (clock source : Trig.FEB のオシレータ)



header pinに出力し、オシロスコープで測定 →

カンマワードのタイミングの位相で遅延時間の変動を確認



リカバリクロックの位相が固定されていることを確認

データ確認：カウンタデータをTCP/IPで周期トリガーで取得

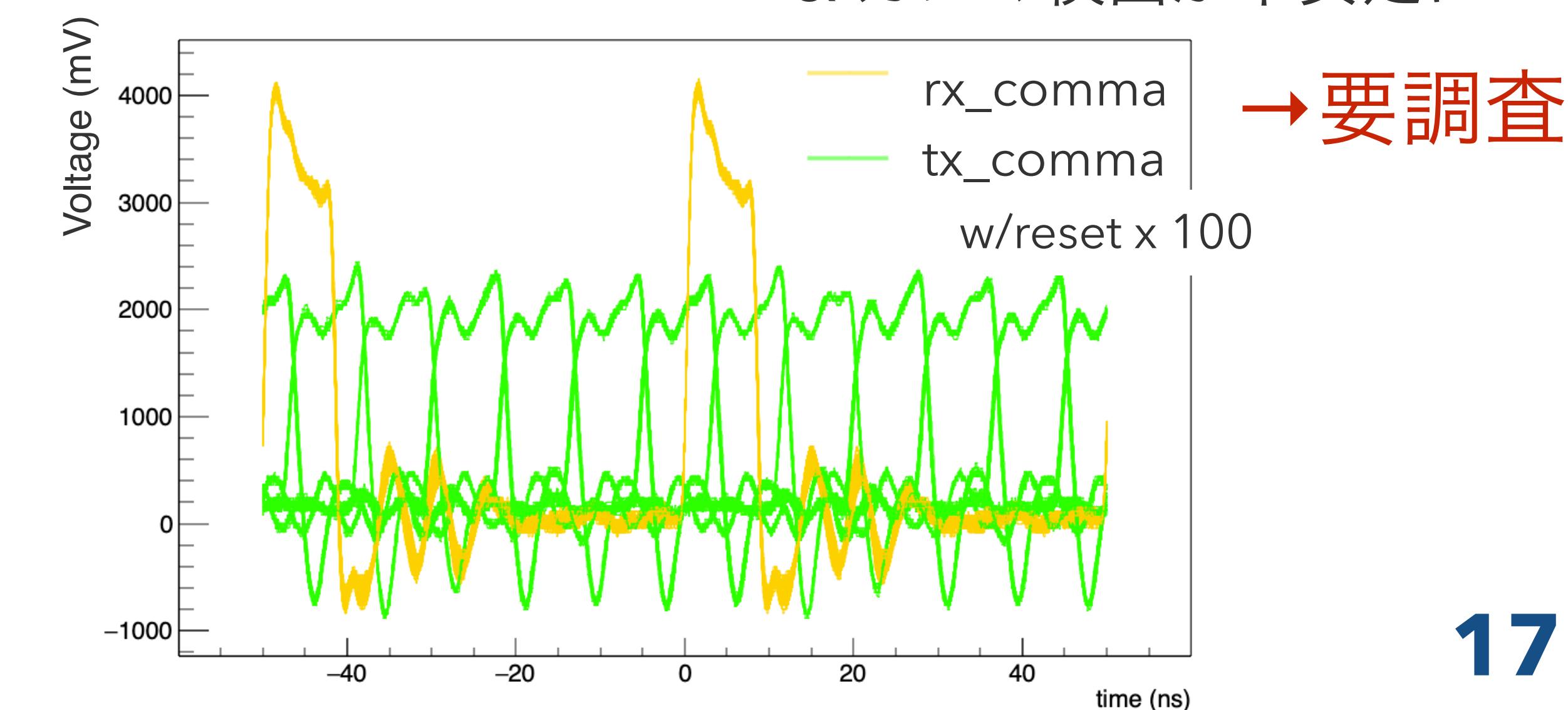
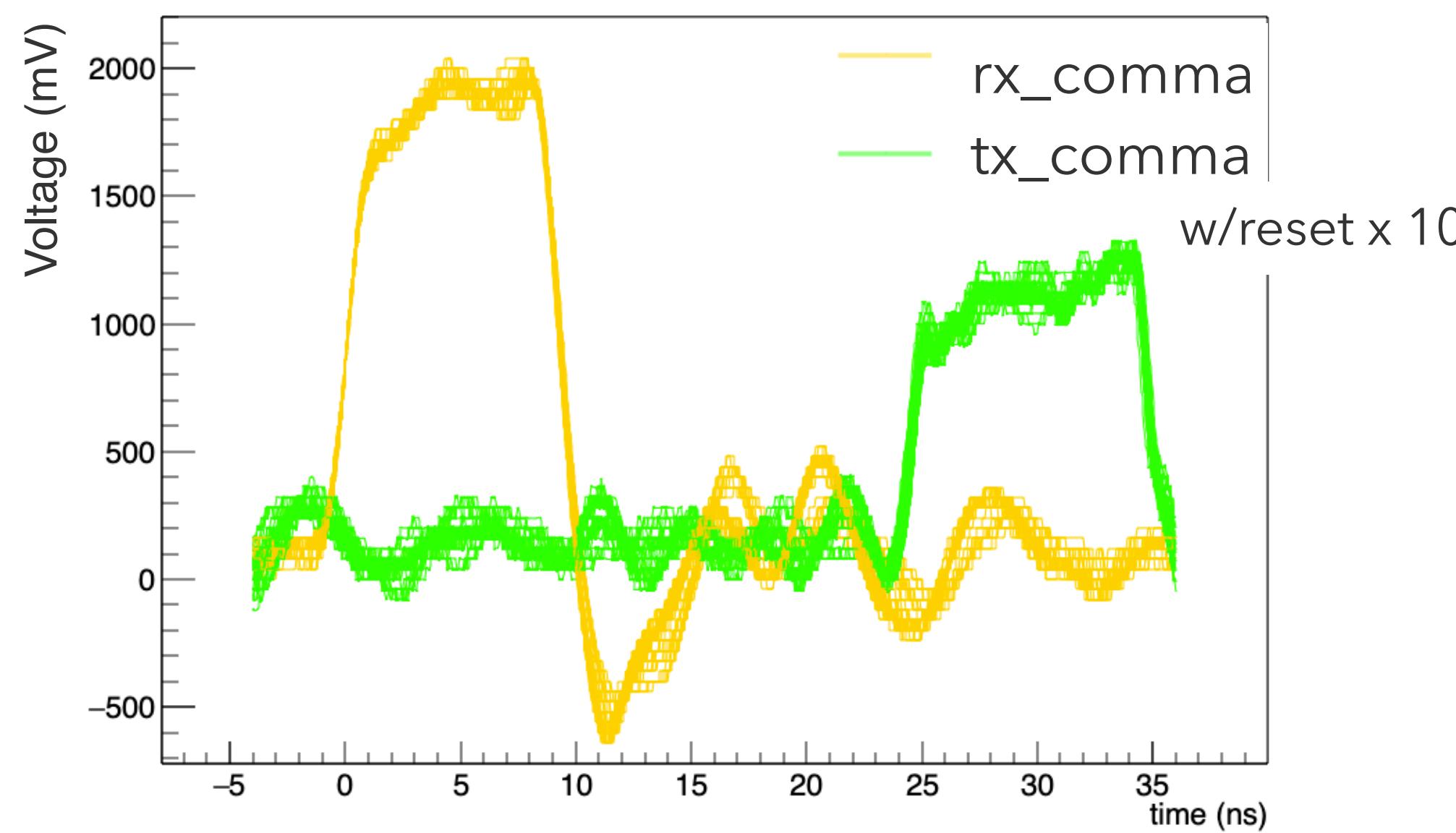
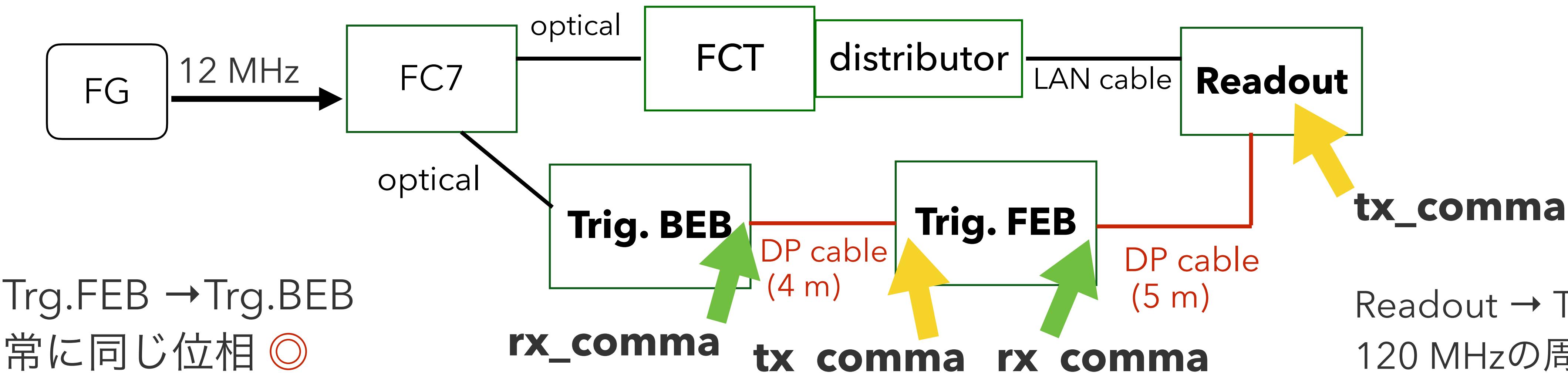
00	00	a6	a6	a5	a5	a4	a4	a3	a3	a2	a2	00	00	00	00
00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00

1event = 16 bit × 2 lane × 5フレーム

2 laneでデータが揃っている◎

固定遅延通信firmware検証 @フルチェーンセットアップ

FC7込みのフルチェーンセットアップで位相測定



まとめと今後の展望

- **COMET Phase-I** は $\mu - e$ 転換を探索する実験
 - 目標单一事象感度 : 3×10^{-15} (先行実験の100倍)
 - トリガーシステム
 - 高速 & 高事象選別 & 高安定性が求められる
 - CDC(飛跡検出) & CTH(タイミング検出 & 4重コインシデンス) の組み合わせ
- **CDCトリガーシステム通信試験**
 - 通信安定性測定 : 全基板で1%未満のデッドタイムで安定した通信を確認
 - トリガー遅延時間測定 : 要求値 8.5 nsecを満たすことを確認
 - しかし、リセットによる遅延時間の変動が問題となっている
 - 研究室や実験グループを超えて相談できる繋がりが非常に助かっています
- **今後の展望**
 - 固定トリガー遅延のためのfirmware改修
 - 全数で遅延時間測定 & トリガー性能試験